

文や言葉のつながりから読みを深める授業展開の工夫 ～「意味マップ」を活用して～

北川 勝則

物語文の読解を中心に「意味マップ」を活用してきた。一人学びをしたことを小グループで交流する際に、互いのマップから自分のマップに意見を取り入れることで、全体での読み深めに生かすことができることが分かった。意味マップを活用して文や言葉のつながりから読みを深めるためには、発問を精選していくことが不可欠であると共に、全体での話し合いからつながりを意識できる板書にさらなる工夫が必要である。

キーワード：つながり、意味マップ、授業展開、文学教材、話し合い、ごんぎつね

1. 学びの質を高めるために

1. 1. つながりと学びの質の高まり

今年度、国語科部では言葉と言葉や文と文のつながりを意識した対話を通して「発想力」「論理力」「表現力」をつけることを目指してきた。

ここでの対話には主に、教材文の文と文や言葉と言葉のつながりを読むという「対象との対話」と自分の解釈と友だちの解釈のつながりを吟味することで、より教材を深く理解する「他者との対話」が含まれる。そして、「対象との対話」「他者との対話」を通して「自己との対話」が行われ自己の認識が更新されることが実感できるであろう。

学びの質の高まりをめざすためには、これらの3つの対話が有機的に機能する必要があると考えた。

1. 2. 意味マップの活用

つながりから学びの質の高まりを支援するために意味マップを活用することにした。意味マップは以下の4点において有効であると考えたからである。

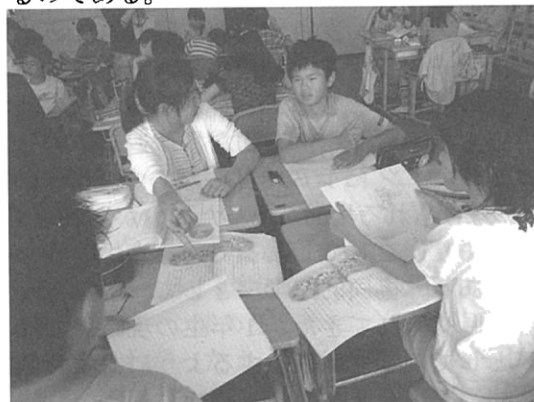
①自分の考えを持ち、その考えを深める。

意味マップでは、課題となるものをマップの中心に書き、根拠となる文や言葉をその周辺に書き広げていく。関連する記述をつなげたり書き加えたりすることで自らの読みを深めていくことができる。また、教材文のつながりを視覚化することができるという利点がある。ノート1ページにまとめられたマップを見るとどの言葉とどの言葉が関連しているのかを直感的に理解することが容易になるのである。

②他者との対話に有効に働く。

「他者との対話」である意見交流の場では、意見が同じでも根拠とする文が違っていたり、同じ文を根拠としていても、意見が違ったりする場合が出てくる。小グループでも全体の話し合いでも

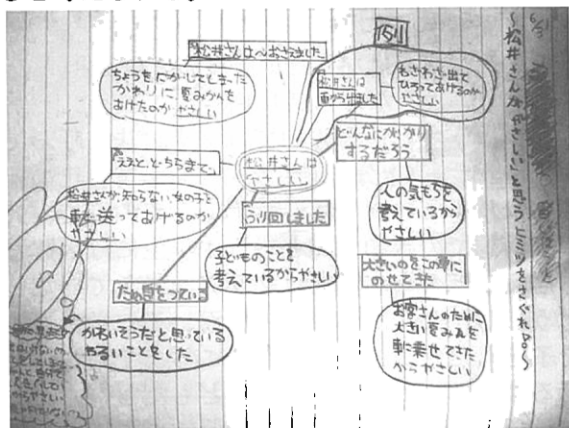
対話は音声言語で行われることが中心である。対話によって読みは深まっていくのだが、聞き落としも多くなる。マップを示しながら対話することによって、友だちとの意見や根拠の違いを視覚的に比べたり、つながりを見つけたりすることもできるのである。



(写真1 友だちのノートを示しながらの対話)

③自己の変容が認識できる。

一人学びをしたノートを使い、友だちと交流していく中で、他者の意見を取り入れたり自分の認識を更新していく。その際に、意味マップに新たな考えを書き加えていくことで、自己の認識の更新が視覚的にも確認できる。意味マップを活用することで「自己との対話」を支援することもできると考えられる。

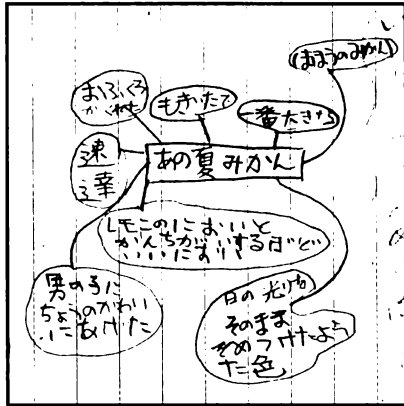


(写真2 友だちの意見を加えた意味マップ)

④焦点化が視覚的にできる。

学校提案にもあるように課題を焦点化することが学びの質を高めるために必要である。

例えば、『白いぼうし』で、「逃げた蝶の代わりに帽子に入れた夏みかんは、どんな夏みかんなのだろう。」という課題の場合にはマップに書いてある「夏みかん」からさらに読み取ったことを書き加えることでつながりを意識しながら読み深めていくことが視覚的にも分かりやすくできるのである。



(写真3 児童のノートの一部)

2. つながり意識した授業展開

2. 1. 「ごんぎつね」の授業構想

『ごんぎつね』は、ごんが兵十に対して、いたずらの反省からひとりぼっちの境遇への共感へと思いを募らせていく。しかし、その想いは届かずにごんは兵十に撃たれてしまう。つぐないの行為が理解されるのは死の間際であったという悲劇的な結末である。この教材では、兵十に思いを募らせていくごんとそれに気づかない兵十のそれぞれの状況を各場面ごとにとらえていくことが教材をより深く読むために必要なことであると考えた。

単元としては、教材文の冒頭にある、「わたしが村の茂平さんから聞いた話」という作品の構造を使うことにした。「ごんぎつね」の話は結末部分からして兵十が誰かに話したからこそ伝わった話であると考えられる。「兵十は誰にどのようにごんのことを話したのだろう。」ということを考えて創作文を書くということを単元の大きな目標とした。兵十が話すことを考えるためには、各場面におけるごんと兵十のすれ違いを理解していく必要が出てくると考えたからである。

第1次 4時間

物語のはじまりに着目して、物語の終わりからどのような経緯があったのかを考えると、この学習の見通しを持つ。

第2次 8時間

各場面ごとにくわしく読み進めていく。

第3次 3時間

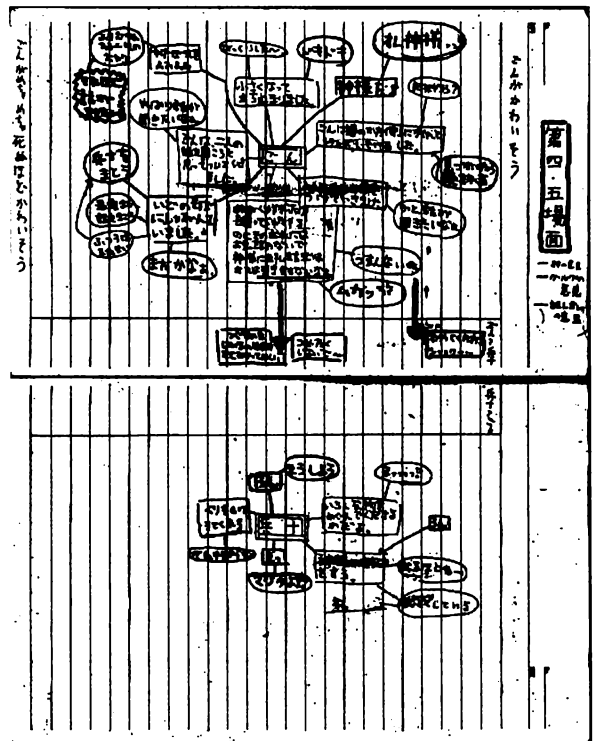
最終場面のその後を創作して書き、交流する。

(表1 つながり意識した単元構成)

2. 2. 意味マップを使って

上記のように『ごんぎつね』をより深く読み取って行くにはごんと兵十の相互にどう相手を知っているのかを理解していく必要がある。

本単元では、ノートを縦に上下に見開きで使い、各場面ごとに上のページをごんぎつねに関すること、下のページを兵十に関することとして、読み取ったことをそれぞれに記入するようにした。そして、上下のページの間にスペースをとり、お互いが相手をどう認識しているのかを書き込むこととした。



(写真4 マップを使った児童のノート)

2. 3. 板書やふり返し図を使って

意味マップについては、一人学びをするノートで使用するだけでなく、板書や学びの振り返り掲示にも使用した。

ノートは小グループでの交流で活用されるが、全体の話しあいの場では活用しにくい。そこで、全体の話しあいの場においては、黒板をマップと

をしに来たんだと思ったと思います。」

T…………「他のところはどうか。」

C16…「4 2 段落を開いてください。『ごんはこっそり中に入りました。』とあるから兵十は気づかなかったんだと思います。」

C4……「7 8 ページを開いてください。『またいたずらをしにきたな』とあります。兵十はごんがいたずらをしにきたと思います。加助に神様のしわざと言われてそう思っているし、ごんはいたずらをすると思っているから気づかなかったと思います。」

C19…「第1 場面で、『ごん』イコール『悪いきつね』というふうに兵十は思い込んでいるし、昼間にくりを置いているところを見られても逆に盗んでいると思うと思います。」(後略)



(写真6 授業での発言の様子)

4. 実践の考察

第2 時第2 場面の一人学びの時には、C2 の兵十のマップには、「うなぎを食べさせることができなかった。」「おっかあはうなぎを食べたかった。」と書き込みがしてあった。この時点では、ごんの想像と事実を混同していることが分かる。しかし、小グループでの交流の際に、同じグループのC23 のごんのマップの書き込み「うなぎが食べたいと思いながら死んだんだろう。→ごんの空想」を取り込み、自分のごんのマップに「うなぎが食べたいと思いながら死んだんだろう。→ごんのそうぞう」と書き加えている。

ここから、上記のC2 の発言につながっているのである。C2 の発言を受けてC27 が発言することで、「おっかあがうなぎを食べたいと言ったかどうかは、はっきりと分からないこと。」「『うなぎを食べたいと言った』というのは、あなの中でのごんの想像であること。」がクラス全体で確認することができたのである。

C23 は、ここの部分では発言していないが、マップを使った交流によって全体学習の場で意見

が生きることになったと言えるだろう。

それに対して、第8 時第6 場面の話し合いでは、個々の児童は根拠となる文を示しながら発言しているし、第6 場面以外からも理由を示すことができている。しかし、なかなかそこから読みを深めることができなかった。

これは、「どちらがかわいそうか」という第2 次を通して考えてきたこと自体が子どもたち自身の課題となり得ていなかったことに原因があるのだと思う。

また、「どちらがかわいそうか」という課題で考えて行く中で「兵十はどうしてくりに気づけなかったか」に焦点化して話し合い、兵十がごんに対していたずらをしにきたとしか考えられないほどごんの思いが通じていないことを読み深めていかせたかった。しかし、その課題が「どちらがかわいそうか」につながっていくのかが子どもたち自身に明確にできなかったところに問題点があったのだと思う。

5. 成果と課題

文学作品の読解では、どうしても一部の児童の発言をつないで読み深めていくことになり、気づけばその他の児童は課題から心がはなれてしまっているということが多かった。その改善のためには、一人ひとりの読みをつなぐ手立てが必要だと考え模索してきた。

今回活用してきた意味マップは、友だちの意見を取り入れるということに関して有効であったと思う。言葉での話し合いは手軽にできるという利点はあるが、その場限りで消えてしまうことが多かった。しかし、小グループでの話し合いの際に、友だちの意見の優れた部分や自分にはなかった発想を自分のマップに取り入れ、そこから自己の認識の更新をはかっていくことが少しずつできるようになってきている。このことは成果としてあげられるのではないだろうか。

しかし、今回の「ごんぎつね」の単元では、板書や振り返りのためのまとめマップは、読みを深めるための手立てとして有効に機能することがなかった。板書にマップをどのように取り入れることが読みを深めるために有効であるのかということや、全体学習でのマップをどのようにまとめていくのかということは今後の課題となった。

参考文献

塚田泰彦(2005)「国語教室のマッピングー個人と共同の学びを支援するー」,教育出版
佐藤公治(1996)「認知心理学からみた読みの世界ー対話と協同的学習をめざしてー」,北大路書房